沖縄県家畜衛生試験場八十年史

平成15年　3月

沖縄県家畜衛生試験場

序　　文

沖縄県知事
稲　嶺　惠　一

本県の畜産は、県経済の発展と豊かな食文化を背景に発展し、農業の基幹作目としての地位を築いてまいりました。

一方、今日の畜産を巡る内外の諸情勢は国際的にはWTO農業交渉にみる畜産物輸入関税の引き下げ、国内では畜産環境保全、防疫面では国内への牛海綿状脳症（BSE）及び口蹄疫などの悪性伝染病の侵入防止対策など、多くの課題があります。

このような課題を乗り越えて、本県の畜産業を持続的に発展させるためには、畜産業の基盤となる家畜衛生技術の開発が重要であるばかりでなく、安全・安心な畜産物の生産についても、家畜衛生試験場に寄せる県民の期待は大きく、その果たすべき役割は重要であります。

こうした時に、「家畜衛生試験場八十年史」を発刊し、その成果を記録するとともに将来の展望を拓くよすがとすることは、誠に意義深いものと考えます。

沖縄県家畜衛生試験場は、大正１１年、沖縄県立獣疫血清製造所として創立され本年で８０周年を迎えました。この間、幾多の変遷を経ながら、豚コレラワクチンの製造やオウシマダニの撲滅法の開発によりこれらの疾病や害虫が撲滅されるなど、さまざまな家畜疾病に対する予防法及び治療法の開発を行い、本県の畜産発展に大きく貢献するとともに、幾多の輝かしい研究業績を重ねてまいりました。

本誌発刊にあたり、家畜衛生試験場の発展に多くの御支援をいただきました関係団体の方々や畜産農家の皆様に対し心からお礼申し上げますとともに、今後とも沖縄の畜産の振興に一層のお力添えをお願いいたします。

８０周年にあたって

沖縄県農林水産部長
天　願　貞　信

沖縄県家畜衛生試験場は、大正11年真和志村字安里に沖縄県立獣疫血清製造所として創立されてから本年で８０周年を迎えました。

沖縄県は、気候温暖で年中青草に富み、畜産業が有望であることは歴史の示すところであり、中でも養豚は明治以前から県民にとって重要な産業として位置づけられ、本県独特の食文化を形成してまいりました。

家畜衛生試験場創立の経緯は、県の養豚産業に壊滅的な大打撃を与えた明治41年からの豚コレラの度重なる発生による県民の豚コレラ撲滅に対する強い要望が沸き起こり、県は血清及び予防液を製造する獣疫血清製造所を創立するに至りました。

その成果もあり、養豚産業は安定して着実に発展を遂げてきておりますことは、まことに隔世の感があり喜ばしい限りであります。

また、飼育適地といわれる肉用牛につきましても、平成１１年に県内からオウシマダニが清浄化され、順調に発展していることは頼もしい限りであります。

今や、本県の畜産は、肉用牛で全国第10位、豚で第９位の飼養頭数を誇っており、まさに我が国の肉類供給産地としての地位を確固たるものにしているところであります。

一方、今日の畜産を巡る内外の諸情勢は、WTO農業交渉による関税の引き下げや、国内では環境保全や安全性などの難題が山積し、防疫面では国内へのＢＳＥ及び口蹄疫などの悪性伝染病の侵入など、多くの課題があります。

今後とも、引き続き本県の畜産を発展させるためには、根底をなす家畜衛生技術の開発が重要であり、安全・安心な畜産物の生産についても、家畜衛生試験場に寄せる県民の期待は大きく、果たすべき役割は重要であります。

こうした時に、「家畜衛生試験場八十年史」を発刊し、先達の足跡を記録し、将来の礎石とすることは、誠に意義深いものであり、研究員各位の今後の尚一層の精進と、関係各位のこれまで以上の御指導、ご協力をお願いするとともに、本県の家畜衛生の研究機関としての家畜衛生試験場のさらなる発展を期待します。

発刊のことば

沖縄県家畜衛生試験場長
山　内　　修

大正１１年４月に沖縄県立獣疫血清所として、島尻郡真和志村字安里に設立されてから、８０年を迎えました。本県は戦前から豚肉消費は食文化として密接な関係があり、豚の飼養頭数も都道府県に比べ遙かに多く、養豚県として位置付けられていました。しかし毎年伝染病である豚コレラが発生し、特に大正１０年には全島に蔓延し沖縄の養豚は壊滅的危機に直面しました。その防疫対策として、動物用生物学的製剤（豚コレラ、豚丹毒）の製造および家畜疾病の調査研究機関として獣疫血清所が創立されました。その後、豚コレラ、豚丹毒発生の防圧、昭和６年に全島で猛威を振るった牛のピロプラズマ症の治療薬としてイスラビン開発等数々の業績がありました。

ところが、第二次世界大戦ですべてが荒廃し施設、備品等全部焼失、機能停止により機関が消滅しました。家畜の飼養頭数も激減していましたが、徐々に養豚経営の回復の兆しが出てきた矢先に昭和２２年豚コレラが全県に蔓延し、農家に甚大な被害を与え、その防疫対策としての予防液並びに血清類は本土に依存していたため時宜を失することが多く、戦前設置されていた当場の新規設立の強い要請により、昭和２５年５月真和志村字古波蔵１１２番地（現在地）に家畜検診所として発足、同年１０月琉球家畜衛生研究所として許可されました。

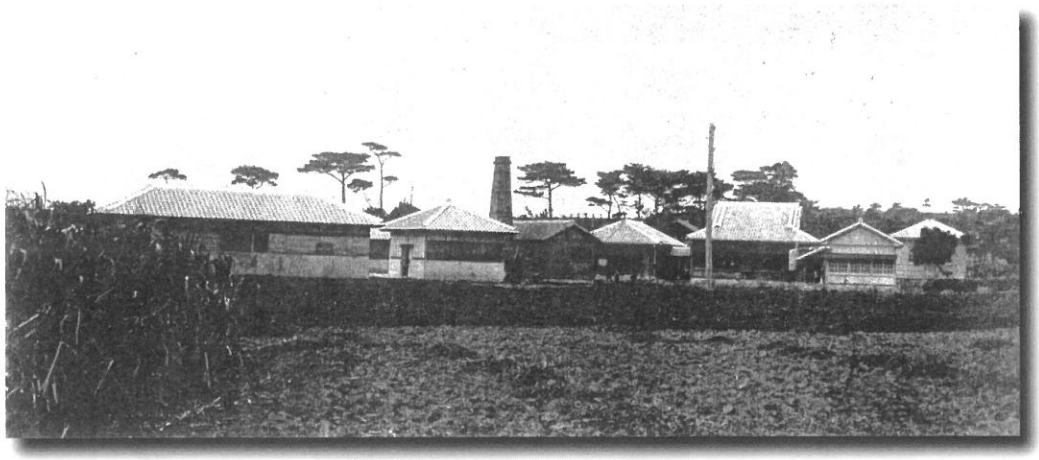
昭和２５年から昭和４７年本土復帰までの業務実績として、動物用生物学的製剤（豚コレラ、豚丹毒）の製造および発生防圧、昭和３１年に宮古島で炭素の発生、又昭和４５年に沖縄で初めてニューカッスル病が発生したが迅速的確な診断と防疫処置によって清浄化に成功しました。又その期間に琉球獣疫製造所から琉球家畜衛生試験場と２回の名称変更がありました。昭和４７年、本土復帰により沖縄県家畜衛生試験場に改称され現在に至っています。

復帰を契機として、県外関係機関との技術交流がなされたほか、国庫特別助成による沖縄県農業関係試験研究機関施設備品整備事業で施設、備品が整備されました。近年における家畜飼養形態の大型化、集団化に伴う家畜疾病や亜熱帯地域における特殊疾病における調査研究を行い予防診断技術開発し、予防、防圧に努め時代の要請に応じてまいりました。特にバベシア病については、八重山地域において昭和４６年から２７年間取り組んできて撲滅が達成され、八重山地域からの牛の移動制限が解除され、畜産の発展に貢献しました。

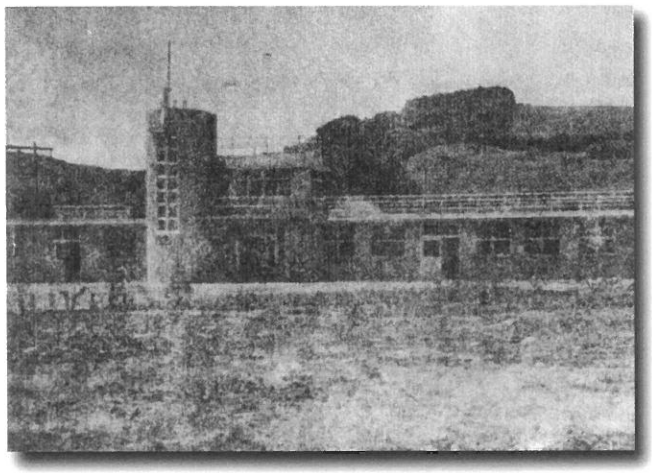
しかし、本県の、畜産を取り巻く情勢は依然として厳しく、他県とは異なる地域特有の疾病の発生、また距離的に近い東南アジアで発生がみられる海外悪性伝染病の侵入防止対策ための試験研究体制の整備が必要であり、これに果たす試験研究機関の役割は極めて重要であります。８０周年を迎えて、なお一層の情熱と創意を結集し、畜産振興のため、試験研究に励む所存であります。

本誌は８０周年を記念して、当場の沿革と業績を取りまとめました。先輩諸賢の辿ってきた苦難の足跡を偲ぶとともに、今後の沖縄畜産の発展への道しるべとして活用されれば幸いであります。

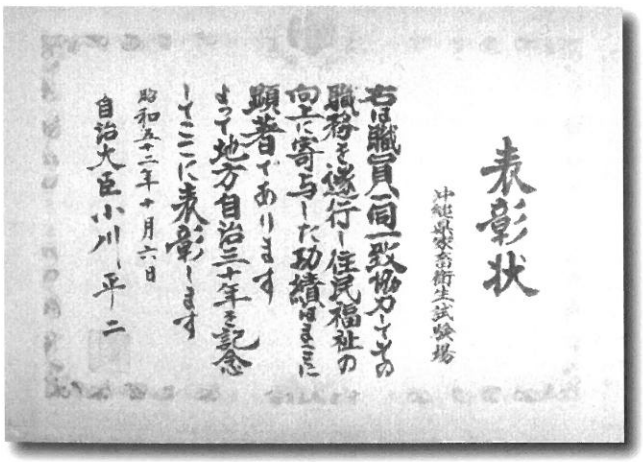
平成１５年３月



沖縄県立獣疫血清製造所全景



琉球獣疫血清製造所本館



表彰状

沖縄県家畜衛生試験場

右は職員一同一致協力してその職務を遂行し住民福祉の向上に寄与した功績はまことに顕著であります
よって地方自治三十年を記念してここに表彰します

昭和五十二年十月六日

自治大臣 小川平二

◀全国農林水産関係功労者表彰

沖縄地域で発生した家畜の各種重要疾病の検査及び試験・生物学的製剤の製造応用により、家畜疾病の多発を防止し畜産の発展に寄与した功績が認められた。

歴代所長

初代 賀島　政基
（大正11年～大正15年）

2代 大橋 正之助
（大正15年～昭和14年）

3代 橋口　　渡
（昭和14年～昭和20年）

歴代場長

初代 当山　真秀
(昭和25年～昭和31年)

4代 高江洲 義弼
(昭和38年～昭和41年)

2代 城間　哲雄
(昭和31年～昭和35年)

5代 福地　清行
(昭和41年～昭和42年)

比嘉　勇光
3代(昭和35年～昭和38年)
6代(昭和42年～昭和50年)

宮里　松善
7代(昭和50年～昭和51年)
10代(昭和58年～昭和59年)

歴代場長

8代 上里　宣治
（昭和51年～昭和55年）

12代 大城　喜光
（昭和63年～平成３年）

9代 宜野座 金次郎
（昭和55年～昭和58年）

13代 外間 善一郎
（平成３年～平成６年）

11代 宇良　宗輝
（昭和59年～昭和63年）

14代 當間　正一
（平成６年～平成８年）

歴代場長

15代 仲村　　裕
（平成８年～平成12年）

17代 山内　　修
（平成13年～）

16代 喜屋武 幸紀
（平成12年～平成13年）

沖縄県家畜衛生試験場全職員　2003年 元旦